

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第三部

第十四章

Cursed Principality

峯村 明

リ・コンストラクション

[登場人物](#)

[14・Cursed Principality](#)

[164.](#)

[165.](#)

[166.](#)

[167.](#)

[168.](#)

[169.](#)

[170.](#)

[171.](#)

[172.](#)

[あとがき](#)

[奥付](#)

登場人物

桧山 健	27歳の実業家
ひろ	健の妻
真	健・ひろ夫妻の子
エドミール・アウレア	ポルタアウレア公国の皇太子
ソフィア	エドミールの叔母

14・Cursed Principality

164.

7月のアデレード・ヒルズは真冬である。真冬といっても日本では桜がほころぶくらいの気温で、雨期である。晴れた日には休眠中のぶどうの管理作業にけっこう人が出ているが、今日はだれもいない。夏の間、茂った枝は必要なものを残してさっぱりと切り落とされ、下草は茶色く枯れて、何日か振った雨のせいで畑はぬかるんでいる。

真冬のぶどう園を、健は毎年訪れる。ぶどう園を、ではなく、奥まった墓地を。彼の両親が亡くなったのが7月だった。

しんと静まり返った冬木立の中の石畳の道。古いアイアンのフェンスが続く。墓地はアデレード・ヒルズに住む人たちが共有していて、ドイツ風。今日のような曇り空のもとではなお一層風情がある。

今日は五歳になる息子がいっしょだ。

雨はやんでいるが、息子はレインコートを着込み、長靴を履いている。アデレード・ヒルズまではちょっとした遠出、それも大好きなパパといっしょ。息子は、「今日はこれを着るんだ！」と、朝から微笑ましく張り切っていた。水色のレインコートは少し大きめで、フードを被った後姿はまるで……
(てるてる坊主だな)

とつとことつとこと先を走っていく息子に、健は声をかけた。「真(しん)、転ぶなよ——」息子はお供え用の花を抱えている。

とたんに、木立の向こうで悲鳴があがった。転んだらしい。

言わんこっちゃない。だいじょうぶか？

駆けつけてみると——息子はひとりではなかった。男が石畳に膝をついて真を立たせ、水たまりに散らばったユリの花を拾い集めていた。上等のカシミヤのコートが水たまりに触れている。

「ほら。花はだいじょうぶだ。きみは？」

「うん。へいき。でも、花、ぬれちゃった」

「あそこへ置きたいのだね。持ってってあげよう」

立ち上がってみると、男は長身で、縦ロールの艶やかな黒髪が縁どる横顔と漆黒のロングコートが美しく、健は声をかけるのも忘れて思わず見とれてしまった。しかし——こんなところで何をしていたんだ？

165.

「きみの名は？」

「しん」

「しん、このお墓のひとは、きみの？」

「おじいちゃんとおばあちゃん」

男は黙って、ゆっくりと振り向いた。緑色の瞳。

——どこかで会ったことがある？ どこだっけ——

墓前には真が抱えてきた白いユリと、その横に、淡いピンク色のバラの花。

「おじさん。服がぬれちゃってる。ぼくのせいだね」

男はちょっと笑った。「そうだな、きみのせいでコートが汚れた。お詫びをしてもらわねば」

「おわび？」

「私の家まで、来なさい。きみのパパには私が話す」

いつの間にか真は男と手をつないでしまっている。男は健に言った。「ご子息を預らせてもらう。迎えに来てくれたまえ。住所は——」

*

「ひろ！ さらわれた！！」

「落ち着いてよ。だれが、どこで、いつ、どのように、なぜさらわれたのよ？」

「5w1Hやってる場合か！！ 真が拉致されたんだ！ 取り返しに行く！ いっしょに行こう！」

*

あの男には見覚えがある。五、六年前に、ほんのいつとき、顔を合わせたただけだったが。互いに名乗らなかったが。あの男だ。間違いない。

それにしても、なぜ。

質素なアイアンの門には鍵はなく、誰でも出入りできる。だから昨年も、一昨年も、その前の年も、毎年、エーデルシュタイン・楡山家の墓に淡いピンク色のバラが供えられているのを見た時は、両親の知り合いの誰かなのだろうと思っていた。だが、今回のはどう見たって、あの男が供えたのだ。不案内な者が間違っただけで進入したというふうではなかった。では——毎年、欠かさずに——？

いったい、何者なのか。そして、真を取り戻さなければ。

健は陰しい顔をして帰路を急いだ。ひろを連れて行こう。そもそも、男が教えた住所は、健たち親子が住んでる《ミッドランタ》からそう遠くない。いや。遠くないどころか、健がよく知っている住所だったのだ。

166.

アデレード市の中心部は四方八方をパークと名のつく広大な緑地に囲まれているというより、緑地の中にシティがある感じである。その東の緑地、ビクトリアパークの近くに、男から教えられた住所があった。どこまでが公共の緑地で、どこからが私有地なのかわからないような雰囲気のところだ。その一画に入って、しばらく車を走らせていると、ひろが珍しくおずおずした様子でつぶやいた。

「こんなとこまで入っていいの？」

「途中で降りたら庭で迷うぞ」

建物の車寄せまで乗り入れると、どこからか執事らしい黒服の人間がふたり現れた。

「怒られるんじゃない？」

「……かもな」

黒服のひとりがまず助手席側にまわり、外からドアをあけた。軽く礼をし、ひろに降りるよう促す。それから運転席側にまわり、健を降ろし、自分が乗り込んでどこかへ移動させてしまった。

もうひとりの、少し年配の黒服が、玄関の扉を開け、「ようこそいらっしゃいました」と、ていねいな言い方をした。「お待ちでございます」

この黒服にも見覚えがあった。あの時、病院内を誘導してくれた人だ。今日は制服制帽ではなく、黒服。やはり執事らしい。

屋敷の内に入ってみると、ほどよく空調が効いていた。あちらこちらに飾られたピンクのバラは墓に供えられていたのと同じものだ。健は胸苦しさを覚えた。ほのかなバラの香りと、どこからか流れてくるピアノの音に、遠い記憶をかきたてられる。

「おお」と執事は破顔した。「お上手ですな」

健とひろは顔を見合わせた。執事が主人を褒めているのだと思ったのだ。

こちらへ、と促され、執事のあとについていく。健はひろにささやいた。「この屋敷には大きなピアノがあるんだ。ベーゼンドルファーとかいう……」

執事が大広間の扉を開くと——音楽が——

167.

グランドピアノの前にふたり。ひとは墓地で会った黒髪の男。もうひとは——（真？）

（おまえ、真にピアノ教えたのか？）

（まさか。もしかして幼稚園で習ったのかしら）

《ミッドランタ》にもピアノなど置いてない。なにしろ生まれてこの方、真はピアノとは無縁だった。

黒髪の男と真は並んで腰かけ、連弾していた。どこかで聴いたことのある曲。耳に心地いい。バッハのメヌエット。真が右側にいるということは高音部のメロディを弾いているわけだが——ふと見れば、執事も体を傾げるようにして聴き入っている。彼は主人を褒めていたわけではないらしい。

黒髪の男は来客を知って伴奏の速度を緩める。真はすぐにそれに気づいてメロディの速度を落とす。最後の一音はピアノの両端でポン、と同時に鳴り、演奏は終わった。

三人のギャラリーは拍手せずにいられない。五歳児が弾いているとは思えないみごとな演奏だったのだ。

と、ひろは何を思ったのか、つかつかとまっすぐに、ピアノの方に歩いていく。「パパだ！」と走る真とすれちがう。黒髪の男は立ち上がって、ひろを振り返る。健が真を抱きとめている間に、黒髪の男とひろは見合っていた。そして——

「マミヤ——」

「——バイスロイさま」

(やはりそうだったか)

(こいつはバイスロイだった)

泣きたいような腹がたつような、妙な気分だ。なぜだろう、と黒髪のバイスロイがうやうやしくマミヤの手をとり接吻するのを眺める。

「なんと、真はそなたの子だったか。すると……彼は……」

バイスロイはマミヤを見、真を見、さいごに健を見た。そして意外そうに言った。「きみはヒューダーか!？」

「一度会ってる。あの時……医学生について来たのは、ヒューダー、きみだったのか!」

バイスロイはひどく驚いた様子で言った。頭のとっぺんからつま先までまじまじと眺めている。相当、意外だったらしい。

なんとやったものかと迷ってるうちに、真が腰にしがみついてきた。「パパ。おなかすいた」

168.

キッチンから食材をあれこれ乗せたワゴンを押してシェフがやってきた。ちいさな子は不慣れで、どんなものを食べさせていいのかわからないという。「アレルギーをお持ちだといけませんし」

「アレルギーはとくにありません。真、ローストビーフと野菜のサンドイッチはどう？」「ぼくそれがいい！ オレンジジュースもください！」

母子がランチをとっているとなりで、健はバイスロイと乾杯した。イタリア産のスパークリングワインだった。

「今の名はエドミールだ。お見知りおきを。それにしても……ちいさい子どもはたいへんだな！」
「心配したほどじゃなかったと、ひろが言ってた。過ぎてみればなんとやらというやつだろうが。来年の9月には学校にあがる。ようやく落ち着くよ」

劇的再会のはずなのに、妙な会話ではある。互いに聞きたいことが山ほどあって、なにから手をつけていいのかわからない。それで、いちばん手近なところから聞いてみようと思っただけ。

「アデレード・ヒルズの墓地へは、なぜ？」

バイスロイは目だけあげて健を見た。

「墓参りに」

「あの墓に？」

「そう」

「……あまり言いたくないように聞こえるんだが」

「真が……あの墓は祖父母のだと言った。ということは、きみの両親だろう？」

「そうだが」

「……………」

「？」

「きみの母親、ソフィアは、私の叔母だ」

「……え？」

「ソフィアは私の父の妹。ベーゼンドルファーはソフィアがくいで使っていたものだ。彼女は駆け落ちして、子どもが生まれたと聞いて、父が、つまりソフィアの兄が、贈ってやったのだ」

169.

「……もう一度、言ってくれ」

「きみの母親ソフィアは、私の父の妹。ふたりきりの、仲のいい兄妹だった。ソフィアは旅行先で外国人と駆け落ちした。

父はもうれつに怒った。ソフィアも、相手の男も、絶対に許さないと。しかし子どもが生まれたと聞いて……彼女のピアノを贈った」

「……………」

「見た通り、立派なピアノだ。特注品で、世界にふたつとない。これを受け入れられる男なら、認めてやってもいい。裏返せば絶縁状でもあったわけだ。しかし——ピアノがどうなったかわからぬまま、ソフィアと相手の男は、子どもを遺して、他界してしまった。

心臓に持病を抱えていた父は発作を起こし、私はまだ年端も行かない学生だったが、父の代りにここへやって来た。遺された子どもに会わなければならなかった。

ところが、子どもはとうにいなくなっていた。男の方の親戚が引き取ったのだという。私はいきさつを知っている弁護士を探し出して、その親戚というのがどこに住んでいるのか教えてくれと頼んだ。まあ、頑固なじいさんだったな。絶対に教えられないと、きっぱりと断られた」

セオデリック・ウィリアムス、グッジョブ！

それだけはくっきりと、健の意識の表面に浮かんだ

初めて聞く両親の事情は衝撃的だった。感情は硬直、頭の中は大混乱を乗り越えて真っ白だ。ことによっては、自分はこの男に引き取られていたかもしれなかったのだ。そうになっていた場合のことを脳内でシミュレーションしてみようとしたが、できなかった。この男の話が事実なら、彼我はいとこ。遠い親戚の桧山善人氏とは比較にならないほど血縁的に近いはずなのに。

べつに、この男が胡散臭いなどとは……けっして……いわないが、どこかに、こう、圧迫感がある。持って生まれた、生来の、権力のオーラとでもいおうか。この男の言うことを聞くことは、支配下に置かれる、自由を奪われるような気分になるようだった。ウィリアムスもそう感じたのではないだろうか、健がそう思っただけで、ウィリアムスの思惑はちょっとちがう所にあったのだが。

「ソフィアはとても美しい人だった。あのバラのように、高貴で、清潔で、純粹で、華やかで。私は彼女からピアノを教わった。このピアノで。このピアノには彼女の思い出がたくさんある。彼女が旅行先から消えた時、こどもが生まれたと聞いた時、おそらく私の中で決定的になにかが変わってしまった。説明しがたいことだが、変わってしまったのだ。もう二十年も前のことなのに、あの時の気持ちはいまだに整理がつかない……」

お腹がいっぱいになった真がピアノの下にもぐりこんでいる。——そういえば、こどものころ、あの下に入りこんで遊んだ覚えがあるな、と健が思い出していると——

「あー、へのへのもへじだー」

えっ、と、バイスロイ。「なにかあるのかい？」、と立って行く。

「ほらここ」真が指さした先に青いクレヨンの落書きが。

「——そういえば、こどものころ、あの下に入りこんで覚えたてのへのへのもへじを描いた覚えが」

とたんにバイスロイの目が吊り上がった。「き、きさまかー！！」

「い、いや、オレは父親から教わっただけで……罪のないこどものしたことじゃないか……」

「きさまらー！ 親子二代でポルタアウレアの至宝に手をつけるとは！！！」

「ま、まで！ ひろ、黒い油性ペン持ってないか？」

「持ってないわよそんなの。なにするつもり？」

「上から塗りつぶせば目立たなくなる」

「かえって目立つわよ。クレヨンなら落とす方法があるわ、たしか、牛乳とかクレンジングオイルで。でも染みになるかもね」

「ママやまでなんてことを……」がっくりとうなだれてしまったバイスロイを真が慰める。「ごめんねおじさん。うちのパパとママが」

170.

「きみはなんていい子なんだ。いいとも。きみに免じて、きみのパパとママの無礼は許そう」

バイスロイは真を抱き寄せ、ぎゅうっと抱きしめた。

「ほんと？ おじさん、ありがとう」

真の方も嬉しそうに相手に抱きついている。

(なんか、だんだんムカついてきたわ)

(だろ？ あれこそがやつの本性だ)

ピアノの下であつい抱擁をかわしてから、バイスロイはおもむろに言った。「どうだろう、真」、と。「おじさんのことを、『おとうさま』と呼ばないか？」

真の両親は耳を疑い、真は無邪気に「どうして？」と尋ねる。

「そうしたら、毎日、好きなだけ、ピアノが弾けるよ。おじさんが、いや、おとうさまが、毎日教えてあげられる」

それを聞いた真は目を輝かせ、両親を振り向いた。「すごいや！ ねえ、おじさんのこと、おとうさまって呼んでいい？」

「おまえなあ、真、そんなことになったら、毎日好きなだけ、テニスができなくなるぞ。それでもいいのか！？ おいバイスロイ、そんなところに立てこもってこどもを人質にして、どういうつもりだ！」

「そうよバイスロイさま、寝言は寝てからにしてください。ほら、真、アイスクリームよー」

「わーい」

ピアノの下から這い出してきたバイスロイは部屋着のあちこちを引っ張って正し、威厳を取り戻した。

「私はかなり本気だが」

「なにがどう本気なんだ！？」

かなり不機嫌になってしまった健は腕組みをして迎え撃つ。

「……まあ、気楽にしてくれたまえ」

「気楽じゃない話を持ち出したのは誰だ！」

「私の家系は人が少ない。父は心臓が弱く、その妹は駆け落ち、私には兄弟がいない。私はいずれ父の跡を継がねばならないが、そのあとがいないのだ」

「バイスロイさまは、独身なの？」、とひろ。「そうだ、自分で、結婚して、こどもをもうければ済むことじゃないか」

「結婚なら、した。三回」

「さんかい？」(も?)ひろと健は声を合わせ、顔を見合わせた。

「一人目の妻は結婚して間もなく、モンブランを滑落して大怪我、実家が平謝りしてきて連れ帰った。二人目の妻は結婚して間もなく、不治の病を発症、実家へ帰った。三人目の妻は結婚して間もなく、原因不明の精神疾患にかかり、本人の希望で、しかたなく実家へ帰した」

バイスロイは指折り数えながら三回の結婚の破綻を語った。ひろは涙ぐみながら耳を傾けている。「おかわいそうに……」

「三度もこんなことが続いたものだから、我が家には『呪われた』という枕詞がつくようになった。それ以来、以前は山のようにあった縁談がぱったり無くなった」

健は何と書いていいかわからず、とりあえず、「気の毒に……」とつぶやいておいた。

「私はどの妻も愛していた！ もっと、優秀な医者がいてくれたら！ 何度そう思ったかわからん！ だから父の心臓手術に際して、最適の医者を望んだのだ！ それはともかく」

「そういうわけで、私は跡継ぎに恵まれんが、我が家の系譜にはソフィアの子が書き込まれている。つまり、きみだ。ケン」

「え」

「父は、怒りまくってたくせに！ なんだかんだ言いながら！ ソフィアの子をアウレア大公家の一員として正式に認めていたのだ！」

大公家

アウレア大公家——

あの時、パウジーニはなんと言っていた？

『ポルタは門、アウレアは黄金です』

つまり——黄金門ではないか！

エドミールことバイスロイはかつてのまま、黄金門の後継者だったのだ——

「きみも、きみの子の真も、大公家を継承する権利をもっているということだ」

「きみもその年齢になっていきなりこんな話をされてもこまるだろ。おたくの弁護士に邪魔されたおかげでコンタクトのとりようがなかったのだからしかたがない。

しかし真はまだ五歳。私の養子ということにすればコトは丸く収まる」

「私はいずれ、いどこに会わねばならないと思い、ソフィアのピアノが置いてあるこの家を借り受け、毎年、ソフィアの墓参に行った。いつか会えるだろうと。今日、ようやく、その日が来た。会いたかった！ いとこよ！！ しまさか、ヒューダーだったなんて！！」

171.

それはこっちのせりふだ！ と気色ばむ健を脇へ押しやり、

「あのーバイスロイさま」

「む」

「バイスロイさまが三回結婚されて、三回とも、ってお話きいてて、あたしちょっと思い出したことが……」

「なんだねマミヤ」

「えっと、五年くらい前のことです、健と結婚する前のこと。あたし、おかしなモノにまどわりつかれていたことがあって」

「——おかしなモノとは？」

「なにか霊的なモノです。波動がはっきり、女性でした。言ってみれば女性の幽霊です。その人、かつてのあたしのことや、健のことをよく知ってるみたいでした。いろんなことを言ってあたしを動揺させようとしてた。初めは怖かったけど、あんまりしつこく突っかかってくるから、もうめんどくさくなって、うるさい！ って気持ちになって、『あたしがいったい何をしたっていうのよ！』って、切り返したの。そしたらそいつは……『おまえは私の愛するひとを奪ったのだ』、じぶんが一番不幸なんだ、みたいなこと言って、『おまえが憎い！』って……」

「そんなことがあったのか——」

「ええ、インターハイのリレー決勝の時に。そのあと、あなたと……いろいろあったから、そんなこと、すっかり忘れてたのよ」

「マミヤはそいつを見たのかね？」

「ええ、背が高く肌も髪の色も金色で、すごいグラマーな体してた。バイスロイさま、それって——」

それを聞いたバイスロイは顔面蒼白、ぐらりとよろめいた。「まさか——」

マミヤは駆け寄って体をささえてやり、ソファにいざなった。「だいじょうぶ？」

「そいつは名乗ったのか？」

「いいえ」

「そうか——だが——間違いない。そいつは——」

ごくつと喉をならし、マミヤは言った。「そいつはあたしがやつけたわ。あたしの目の前で粉々に砕け散った。ごめんなさい、あなたを怖がらせるつもりはなかったの」

健は冷静に言った。「おたくの結婚を三回邪魔したのは、そいつだ」と。

「ああ——アレは己の感情のためには手段を選ばぬ。そういうやつだ」

172.

後日、ひろからその話を聞いた間宮宮司はしみじみ、といった口調でつぶやいた。

「前世の行いが今生に影を落としているというわけか。たまらんなあ」と。

「ホントよね。でも、バイスロイさま自身に大きな非があるとは思えないわ。あいつはバイスロイさまのこととなると、とんでもないことをするのよ、人の命なんて、なんとも思っていないし、人間関係も物事も、なんでもかんでも壊してしまう。どうすりゃいいの？」

「前にも言ったが、おまえの手に負えないことに深入りしてはいけない。気がついたかね、そのおひとの父上は心臓に持病があるとか。それに……もしかしたら、健くんの母上も……」

「まさか、お父さん」

「うむ、被害者は三人のお妃に限らんかもな。なんなら父さんが話してみよう。そのおひと、うちへお連れできないかね。父さんはそうそう、うち離れられんし」

「ええ。バイスロイさま、お妃だったひとたちには申し訳ないことをした、謝りにいってくる、なんて言ってたわ」

「……まめなおひとだな」

「ええ。とっても誠実な人だと思うわ。ちょっとくせがあって、健とはあまり仲がよくないんだけど」

「ははは。それにしても、大公家とはなあ！ うちは大公家と親戚になってしまったのか！ 世が世なら健くんはプリンスだぞ」

「じっさいそういうことでしょ、本人はすごく嫌がってる。ぜったい誰にもいうなって。あ、お父さんにしゃべっちゃった」

「しししかし、大公家と親戚だということはだな、大公家と親戚だということなのだぞ」

「落ち着いてよ。親戚どころか、あたしの夫とお父さんの孫は、れっきとしたプリンスなんだから」

14・「Cursed Principality」

15・「Princes Highway」へ続く

あとがき

ここから第三部。

第五章『Porta Aurea』で気づかれた方もそうでない方も。お待たせしました。バイスロイさま登場です。

サブタイトル『Cursed Principality』は『呪われた公国』。それにしても、つくづく女運のない人です。

登場人物本人に訊いたら「絶対にいやだ！！」というのがありまして。その1

もう、いっそ、そいつ…ひろがやっつけたことになってる、○パ○…の思いを遂げさせてやったら？ どう、バイスロイさん？

——「絶対にいやだ！！ そんなことになったら、創造主を呪ってやる！！」

登場人物本人に訊いたら「絶対にいやだ！！」 その2

翼竜の体表面で、例のアラリペの半生化石を見ても、たぶん薄い皮一枚。これで空飛ばそうとしたら。

——「絶対絶対絶対いやだ！！」と猛烈に抵抗されまして。「そんなすっぼんぼん状態で空飛べって！？」

そうだよねーお年頃の男子だもんねー。というわけで、うちの翼竜は羽毛の服を着て、じゃなくて、覆われてるのです。ちゃんとワケがあるのですよ。

2025年5月5日 記

奥付

リ・コンストラクション

第十四章 Cursed Principality

2025年 5月5日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[百花繚乱](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社